批判的共同分析による社会構想への視座
―ホネット理論の運動研究への応用可能性―

Perspectives on Social Concepts through Cooperative Critics: The Possibility of Applying Honneth Theory to Social Movement Research

早稲田大学アカデミックソリューション 社会連携企画部　教育研究コンサルティングチーム 所属
佐藤直樹[1)] SATO, Naoki

0. 問題の設定―批判理論と経験的研究

批判理論に限らず，理論研究が実証研究に結び付くことについて社会学においてあまり考察がなされてこなかったように思われる[2)]。特に，対象となる現実や現場といった場とどのようにかかわるかという視点は，社会学理論研究においては乏しい。そのような状況の中で，ホネット理論も読まれてきているが，ホネット自身の考えは異なる。批判理論の活用，特に自身の展開する承認論においては社会学的分析が必要であると述べる。

批判理論が志向する解放のプロセスについて主張できるのは，「社会学的分析という形で，人々の意識状態や解放の心構えがどのようなものであるかについて明らかにする場合のみ」（Honneth 1994 → 2000 ＝ 2005:95）である。

ホネットはここで，社会学的分析が明らかにすべき対象として「人々の意識状態や解放の心構え」を挙げている。議論を先取りすれば，それは承認論の用語法で言えば，あるべき承認を得ることができないことによって人々が被る「不正の経験」[3)]であり，不正を経験することによって，承認欲求を志向する契機のことである。ホネットは，そうした経験群が学問以前のレベルにあることを指摘し，「学以前のレベルにある審級」（Honneth 1994 → 2000 ＝ 2005:94）と呼んだ。学以前ということで指示されることには多くの言及が可能であるが，ここでは，学問とは異なった世界，学問の用語を必要としない世界，いわば，社会学の専門用語でいう生活世界と理解しておけば十分であろう。それでは，ホネットは，そうした経験群がいかにして見出されるとしているのであろうか。

ホネットはあるインタビューの中で，批判理論が必要とする経験的研究の方法論について問われた際に，それが難しい課題であるとし，かつ様々な議論がフランクフルト社会研究所においてはあるとした上で，「私自身の感覚では，オリジナルな研究手法を作り出すのではなく，あなたの言うように，多様な研究手法に依っていくべきだろうと思います」（Honneth 2002b → Anders, P. & Rasmus, W. 2002:268）と述べている。そのなかでも，出発点として，「構造化されたインタビューやグループディスカッションが有効である」（Honneth 2002b → Anders, P. & Rasmus, W. 2002:268）としている。出発点として有効であるのは，こうしたインタビューやグループディスカッションで，「不正の経験」を聴くことができるからである。ホネットは，ドイツで社会反抗的行動を起こすスキンヘッドのグループへのグループディスカッションの例を挙げている。

スキンヘッドグループへのグループディスカッションによって，「ネガティブな経験に関係する個人史に根差す諸経験があることに触れる機会なるであろうし，またそのことによって，最も良いケースでは，彼ら自身が自分自身の特異な人種差別的行動へ掻き立てられる隠された動機について理解することが可能となるであろう」（Honneth 2002b → Anders, P. & Rasmus, W. 2002:270）

ホネットはこのように質的研究手法によって「不正の経験」を明るみに出すこと，このことを批判理論に必要な社会学的分析としているのである。ホネットの指摘する，調査者と被調査者との相互作用には「アクティブインタビュー」との関連を見出すこともできるだろう。またここで指摘される質的研究手法は今日，現象学的社会学，エスノメソドロジー，構築主義といった社会学的思考に影響を受けた様々な日本での諸研究との関連もあり，また相互に補完関係を想定することも可能であろうと思われる。

ホネットにはしばしば，承認の真偽に対して疑義が呈されるが，筆者の読みとしては，ホネット理論の可能性は質的研究を中心とする経験的研究によって補完されることで，真偽の見定めということを射程に入れることができると考えている。

ホネット自身の言明から引き出すことのできる以上のような展開とは別に，先行研究では，ホネットの承認論を社会運動研究に活かしている文脈がある。それらを整理しつつ，本稿では，ホネットが承認論に備えさせた方法論（「学以前のレベルにある審級」への視点）を加味して，ホネット理論の運動研究への可能性をより広範に検討してみたい。

本稿の目的―「社会的ダイナミクス」論文[4] を読み解く

本稿はホネット理論を運動研究に活かすために，ホネット承認論を方法論として読むことを提示するものである。ここでは，ホネットの承認論の方法論的視座を示した「社会的ダイナミクス」論文を読み解くために，1）ハーバーマスとの比較からホネット理論の特徴を見出し，2）「社会的ダイナミクス」論文において示された承認論の方法論的視座である「学以前のレベルにある審級」[5] をめぐって，運動研究への応用可能性を議論していきたい。

1．ホネット理論のイントロダクション ―ハーバーマスとの比較・戦略の相違

フランクフルト学派としてのホネット―承認論の展開

ホネットの社会理論は，よく知られているように承認論として展開されている。承認という言葉をめぐって，『承認をめぐる闘争』（Honneth 1992 = 2003）の出版以来，20 年程度議論が継続している。承認という言葉だけを見れば，ホネット以外にも，チャールズ・テイラーなど他の社会理論家たちによっても議論がされてきている。また，ホネットの登場で，ハーバーマスを中心としたフランクフルト学派の構図も大きく様変わりをしつつある。ホネットはハーバーマス以来の意識論との決別を引継ぎ，一方で，ハーバーマスが切り開いた行為論をハーバーマスとは異なった形で進展させている。

ハーバーマスは主著『コミュニケーション的行為の理論』（Habermas 1981 = 1985,1986,1987）において社会学説史風の記述をしているが，ホネットも最初の著書である『権力の批判』（Honneth 1985 = 1992）やそれ以前のハンス・ヨアスとの共著になる『社会的行為と人間の性質』（Honneth & Joas 1980）においても，様々な論者を登場させ，自身の位置づけを探っている。ハーバーマスがサールなどに寄りながら理想的発話状況などの独自概念を生み出す言語行為論の展開をコミュニケーションという視点で引き継ぎながらも，ホネットはさらにヘーゲルの構想を枠組みとして活用し承認論を展開させてきている。承認というアイデアの核はヘーゲルから導出し，現代社会に対応した歴史的規定を含む行為論を構築している。共通点とは別に，ホネットはハーバーマスが依拠する言語行為論を退け，独自の観点，特に

実践，身体といった視点を加えながら承認論を展開している。

ホネット理論を行為論として捉え，その行為論を社会運動の観察における作業仮設として位置づけることが本稿の課題である。同課題に取り組むために，ホネット理論を運動研究に応用した先行研究も参照点としつつ，ホネット理論の特徴を押さえながら，ホネットの理論を方法論化する視点について議論を進めていきたい。

承認論の新しさ―ハーバーマスとの比較から[6)]

ホネットの承認論の社会理論としての新しさについては，多様な視点からの特徴づけがありうるが，ここではハーバーマスとの比較から示してみたい。ハーバーマスは，現状の社会に対置して理想的発話状況などの対抗的な社会像を描き出すことで，社会批判の想像力を育んできた。ホネットは，ハーバーマスが展開した言語行為論のさらなる展開を目指して，独自の観点から承認論を展開してきている。筆者なりのまとめによれば，それは，次のような特徴にまとめられる。

ホネットは，ハーバーマスによる社会批判の在り方，言語行為によるコミュニケーション合理性という戦略に意義を申し立てた。ハーバーマスは行為を言語規則の分析にのみ一面化させてしまっているので，行為の身体的―肉体的次元を視野に収めることができなくなっているのである。ホネットが提起している難点は，1）言語規則による合理化体の過程は人間行為の意図によってはっきりと担われているものではないのに，そうした言語規則の合理化に批判可能性を担わせていること（Honneth 1994 → 2000 ＝ 2005:104-105），2）また，人間がその社会化過程において道徳的経験を帯びる前言語的な次元を考察しえなくなってしまうということである（Honneth 2003:284）。

ホネットは，こうして社会化過程に含まれる承認経験を背景に，承認闘争を軸とした社会像を描き出した。ホネットの戦略は，社会に内在することとして，ハーバーマスの戦略とは異なる。ハーバーマスの戦略は，ホネットの理解では，社会外在的にコミュニケーション合理性を対峙させ，社会の是正を図ろうとするものである。一方で，ホネットは社会に内在し，特に人間行為に内在的に存在する規範的準拠点を見出そうする。この点で，ホネットの戦略は，学問の証明以前に存在する規範的準拠点に依拠することに特徴がある。このことをのちに触れるように，「学以前のレベルにある審級」と定義した。

ホネットは以上の特徴を含めて，歴史の展開を「承認をめぐる闘争」として描き出した。ヘーゲルの発想を引継ぎ「愛（家族）・法（社会秩序）・連帯（労働）」の各フェイズにおける「承認と不承認」の在りようを議論している（Honneth 1992 ＝ 2003）。

2. 行為論を経験的研究に活かすために―ホネット理論の場合

以上のような承認論の社会理論としての展開を，経験的研究に活かすためには，承認の類型を作業仮設として設定するという視点がある。ここでは，先行研究を参照点として，承認論の運動研究へのこれまでの応用についてみていきたい。ここでは，ホブソンら（Hobson（ed.）2003:5），成元哲（成 2004），荻野（荻野 2006）の議論を取り上げる。これらの議論は，ホネットの承認に関する定義を作業仮設として位置づける。

ホブソンらは，ホネットの承認論を運動の動機

表 1　ホネット承認論のハーバーマスとの比較

	ハーバーマス	ホネット
行為の捉え方	言語行為	身体実践
批判実践の在り方	コミュニケーション的合理性	承認欲求
社会的カテゴリーの把握	システムと生活世界	承認と不承認

表 2　ホネット理論の運動研究への応用の視点

ホブソンら	運動の動機づけとしての不承認（序文） 子供のドラッグ依存に関わる母親の連帯感醸成（第 10 章） トランスジェンダー運動の政治化の動機づけ（第 9 章）
成論文	承認論で運動の動機付けのひとつとされた「尊重の欠如」による水俣病運動の再検討
荻野論文	運動におけるひきこもり者の居場所づくりにおける承認分析

付けに位置づける。すなわち，社会的に承認を否定されたという感情が発露するのは，社会運動を通してであり，不承認ということの表現活動が政治的動機付けの原動力となるようにである（Hobson（ed.）2003:5）。そのほかにも，子供のドラック依存に関わる母親の運動における連帯感の醸成やトランスジェンダー運動の政治化の動機付けにも「承認をめぐる闘争」が関わっているとしている。

日本でも，成が，水俣病に関わる運動を「承認をめぐる闘争」として捉え，水俣病闘争に関わる人々の連帯感が醸成された要因としても，承認欲求があることを指摘している。「水俣病事件は人と人との関係の基礎であり，歴史の進歩の証でだとみなされていた承認の論理が正面から否定される事態として受け止められていた」（成 2004:68）とし，「水俣病患者でもない人が運動に連帯するきっかけは，まさにここにある。万人が万人に対して承認を行うべきだとされる近代社会において，人を人として認めることを拒否する事件が水俣病である。したがって，水俣病運動は漁民とチッソという企業との相互承認をめぐる闘争である」（成 2004:68）として，承認の否認が運動の組成，また連帯の契機となったことが述べられている。

また，荻野は，ホネットの承認論が社会運動と接続可能であるとするホブソン，及び，成の議論を背景に，ひきこもり者の自己信頼の損壊と回復に至る経験を，ホネット承認論を応用して説明している。ひきこもり者の居場所を作るということによる当事者に対する効果として，「相互の気遣いや傾聴に現れる，情緒的な水準での『承認』」（荻野 2006:317）があるとした。さらに，承認は，ホネットのいう，「公共生活に自律的に参加するうえで不可欠の基礎となる自己信頼」を形成可能にする（Honneth 1992 = 2003:145）ものであるとし，「こうした営みは，肯定的な自己関係の構築に関わるもっとも基底的な運動といえる（荻野 2006:317）と述べた。

運動への動機付けの他にも，承認論は社会運動研究に有効な作業仮設を提供しているといえよう。次節では，こうした視点に加えて，承認論に含まれる基本的な方法論的命題を抽出し，それらを運動研究に応用する道筋を示す。

ところで表に示される視点には，正しい承認とそうではない承認の区別に実証的にどのように対処するのかという大きな課題が存在している。こうした問題に対しては，いまのところ，「未来の構想」次第で，それが正しいのかどうかが決まるというのがホネット理論からの回答になるであろう（Honneth 2002a）。そこで，本稿では，承認論の可能性として，「未来の構想」へのアプローチを示すことになるであろう。

「学以前のレベルにある審級」の含意―ホネットにとってのフランクフルト学派のコア

承認論の運動研究への応用をさらに拡大するために，ひとつの思考実験を行ってみたい。先行研究から示されるように，ホネットが示す承認論に関わる言明は，運動（社会的現実）の分析のための作業仮設として位置づけることが可能だろう。その前提の上で，ホネットが承認論を展開する「社会理論としての方法論」を読み解きながら，運動を分析するための方法論としても読み込むという実験をしてみよう。

ホネットがハーバーマスの理論とは区別して社会批判の方法論として導き出したのが，「学以前

のレベルにある審級」という概念である（Honneth 1994 → 2000 = 2005:94）。同概念は，学以前のレベルとしての社会的現実の中にある社会批判に耐えうる規範的な諸要素を表現している。ホネットは，批判理論を検証し，改めて継承すべき点としてホルクハイマーのいう「解放の歴史的プロセスが持つ知的側面」を取り上げ，次のように理論を位置づける。

「理論は，それが学以前のレベルにある経験の中で成立してくるようなものであることと，将来の実践の中で用いられるものであることとをともにたえず視野に収めうるのでなければならないのである」（Honneth 1994 → 2000:90 = 2005:95）

ホネットは社会理論研究によって，社会的現実の中にある社会批判の規範的諸要素を見出すべく，「承認」論を展開し，それがかつ将来の実践の中で用いられるものであることを求めている。こうした社会理論的な方法論的命題を，社会運動分析に対する方法論的命題として受け取ってみることも可能ではないだろうか。上記の引用の「理論」という言明を，「分析」に置き換えてみるとわかりやすい。承認論を経験的研究に向けた方法論として読むということは，承認論に賭けたホネットの戦略である「学以前のレベルにある経験」に運動分析の焦点を定めるということである。上記の引用に従って，ここでできる限りの定式化をしておこう。

分析が「学以前のレベルにある経験」のなかで成立してくるとは，対象となる運動と共に考察を深めていくことを意味する。また，それが将来の実践への応用であるということは，運動とともに考察を深めた結果から社会批判の規範的諸要素が見出されるということを意味する。こうした読解から，承認の未来構想への志向を読み解くことも可能であろう。

社会批判の規範的諸要素について再度触れておこう。ホネットは，「学以前のレベルにある審級」について論じた論文の中で，ネオナチの例に触れている。ホネットはあるグループに所属していた人物の手記からの引用を持って，人から認められるという経験が必ずしも民主主義社会が認める道徳的行為に結び付くものではないことを示そうとしている。以下，2つの引用を示す。上部が，ネオナチのグループの一員の発言であり，下部はそれに対するホネットのまとめである（Honneth 1994 → 2000 = 2005:116）。

「私たちに話しかけてくる大半の若者たちは，フラストレーションを抱えていました。彼（女）らには，いかなる将来の展望もなかったのです。私は彼（女）らを立てなおし，自己価値の感情をより強くする為に，ときおり褒めることもしました。そういった承認によって彼（女）らは私たちが〈仲間たち〉と名付けた共同体にすっかり依存するようになっていました」

「こうした印象の記述が，原稿の作成を手伝ったジャーナリストの言葉によるものであるとしても，こうした印象は社会的に存在を否認される経験が政治的にどこへも至りうるのかをきわめて明瞭に示している」

ホネットは以上のように，存在の否認経験が民主的に認められる活動に至るかどうかを疑問視している。そこで，ホネットは次の言葉で締めくくる。「当事者たち，存在を否認される者たち，排除される者たちに対して，それぞれの経験を暴力的なカウンター・カルチャーの中で生かしてゆく代わりに，これを民主主義的な公共性の中で明確に言語化するために個人に力を付与するような道徳的文化は，どのようなものでならねばならないだろうか」（Honneth 1994 → 2000 = 2005:117）

ホネットのこのような問いかけは，民主的であることの内実とともに，社会や未来の構想の課題とも密接に関連するであろう。ホネット自身述べているように，「批判に対する内在的アプローチの普遍的な内実について正当化しようとするならば，承認論のために適切に構想される進展の概念を必要とするのである」（Honneth 2002a:518）。社会の進展の構想をすることで，承認論がどのよ

うな社会の未来を描くかが明らかにされなければならないだろう。方法論としての承認論にも未来の構想が要請されると考えて差し支えないであろう。

この点について項を改めて追記的に，筆者の提案を含め述べておこう。

運動を駆動させる実践活動における構想力への視点―ホネット理論における萌芽

ホネットの行為論に関係する実践概念を検討するにあたり，注目すべき文献がヨアスとの共著である。ホネットはヨアスとの共著の序論で，マルクスやフォイエルバッハについて言及し，実践の内実について検討している。ホネットとヨアスは，マルクスのフォイエルバッハ批判を次のように説明する。マルクスは，人間の対象把握活動に，感性的特徴，すなわち，身体的感受性と創造的行為の概念を導入した。フォイエルバッハ批判から導出された「身体的感受性と創造的行為という2つの構成要素は，「対象把握的活動」に導入されている。同概念はマルクスの理論の鍵概念となっている」（Honneth & Joas 1980:25）。

ホネットは，こうした議論の先に「批判的労働概念」を定義している（Honneth 1980）。自らの主体的な活動を視野に含める同概念によって，ホネットは，労働のプロセスのうちに労働を自らコントロールし，労働の構成や構造に変化をもたらす抵抗実践の行為論を展開した（Honneth 1980）。同議論はいまだ未成熟であるものの（赤石 2008），ホネット理論の中でも，実践のプロセスのうちに構想の萌芽を見出そうとする視点として捉えることができるであろう。

3. 運動把握の理論的枠組みとして―「方法論としての承認論」の可能性と射程

ここまで，承認論の運動への応用可能性について2つの点から検討してきた。1）先行研究による運動研究への応用, 2）「方法論としての承認論」の2点である。これらの2点から導き出したのが表にある3つの可能性である。

1）で検討したように，承認欲求の類型を運動分析の作業仮設として位置づけることが可能である。具体的に対象となる運動としては，先行研究でも扱われている人権侵害や差別，あるいはひきこもりなどの社会的少数者，さらには，自然保護にも応用が可能であろう。

また，2）で検討したように，「学以前のレベルの審級」に着目し，運動に内在するアプローチを方法論的態度として導出することが可能であろう。ここでいう内在とは, グループディスカッションなどを通じて運動の対象との現場を作り出しながら，運動の分析を行うことである。ホネットにおいては明示的ではないが，対象者との共同での分析も想定される。

こうした方法論的態度に伴う対象選定，分析方法については，ホネットが既存の方法論との接続の可能性について言及しているように，アクティブインタビューといった手法や対話的構築主義といった理論的文脈などとの多様な対話可能性に開かれているといえよう。

さらに，こうした方法論的態度とも密接に関係するが，運動の未来をどのように捉えるかという視点から「構想」という視点が考えられる。運動への接近方法として，内在的アプローチをとるわけであるが，これは運動に伴走する視点であると

表3　具体的な運動研究への応用可能性―3つの可能性

承認欲求の類型（論）	権利侵害，人権侵害や差別　自然保護を対象として身体実践を含む承認欲求の分析
方法論的態度	内在的アプローチ（グループディスカッションなど）
構想	運動とともに運動の未来について考察する

も捉えられる。そうした共同から運動の未来を，運動とともに構想していくということが考えられるだろう。こうした視点は，運動に未来の姿を読み込む予示的政治とも通ずると考えられる。

社会運動論から見たホネット理論―批判的共同分析（cooperative critics）という視点[7)]

ところで，以上のような方法論として読む承認論は，社会運動論から見た場合にはどのように捉えられるだろうか。社会運動を動機付けから結果までの広義に捉える，ホネット理論は，クロスリーが示すスメルサーのモデルに近しいということがわかる（Crossley 2002 = 2009:315）。しかしながら，違いもある。既に示しているようにホネット理論は広範な社会の構成要素をカバーしており，かつ承認欲求を実践身体のレベルから捉える。

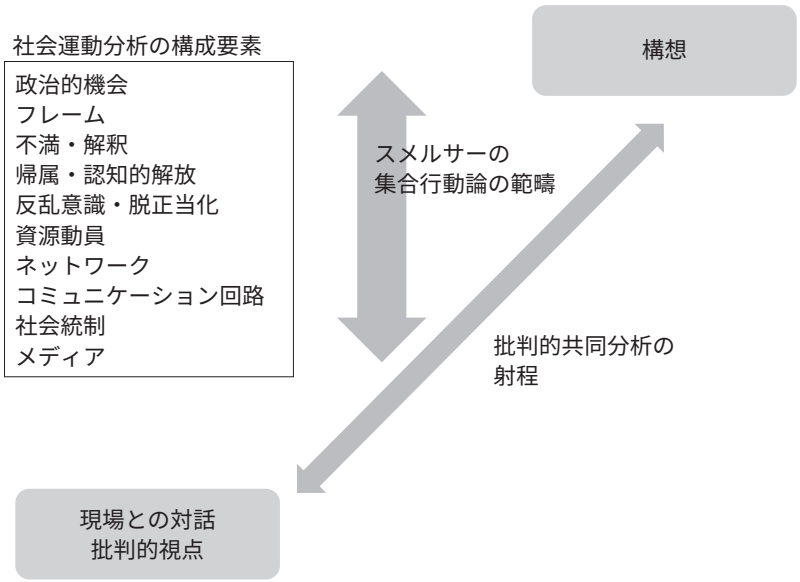
また，方法論としての承認論が示すように，社会的現実に実践身体レベルも含む内在的に存在する批判的な視点や未来の構想を見出すためには，現場の人々との対話が欠かせない。ホネットが示すように，承認論の経験的研究への応用として，グループディスカッションなどの方法が採用されるべき所以である。

現場との対話，批判的視点というキーワードをまとめて，本稿では，「批判的共同分析（cooperative critics）」という視点を提示しておこうと思う。社会運動論もこれまで，現場の批判力に大いに着目してきた。しかしながら，ホネット理論から筆者が示してきたように，広範な社会の構成要素をカバーしつつ，現場との批判的対話を重視する視点は，これまで弱かったのではないだろうか（図 1・クロスリー（2002 = 2009）のスメルサーの論述を参考に本稿のホネット論を加味して作成）。

4. まとめ：ホネット理論から読み解く理論と社会

ホネット理論から導出される運動研究への可能性はさしあたり以上のとおりである。これまで議論されてきたことをつぎはぎにしているだけとも受け取られる可能性もあるだろう。しかしながら，ホネット理論の射程は思いのほか広い。本稿が指摘したように，身体実践にまで遡り，承認欲求の矛先を社会のあらゆる次元における承認領域まで広げていく視座は，研究という実践には手に余るものと言えるかもしれない。しかもその方法論は，ホネット自身の営みからは十分に引き出せない状

図 1　スメルサーの運動理論との比較によるホネット運動理論の特徴



況を考え合わせれば，まだまだこれから考察されるべきものである。本稿が提案したように，現象学的社会学やエスノメソドロジーあるいは構築主義といった理論的文脈との生産的対話も求められるはずである。

ホネットはハーバーマスのある著作の中で，インタビューに参加し，ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論に対し本稿が指摘したような批判を加え，自身の「承認をめぐる闘争」の構想について述べる。すると，ハーバーマスからは，現場で埋もれている声を語る言葉が研究者の言葉の投影に過ぎないのではないかと痛烈な批判が加えられる。ホネットはこの批判にこたえながら，自身の構想について述べた。

「われわれが現にもっている社会的名誉が剥奪されつつあるという持続的経験を印づけることができるのです。これは単なる投影ではないと，私は思います。それを支持するさまざまな歴史的状況証拠があるはずで，労働運動の新しい歴史記述はそれらに立ち入るべきだというのが私の考えです。おそらくこの『社会的承認をめぐる闘争』というモチーフこそ，中心的でつねに潜在的な推進力だったのです」（Honneth 1985 → Habermas 1985 ＝ 1995:273）

ホネットが同引用部で述べているように，ホネット理論は仮説にとどまっている。その構想を経験的研究によって証明していくプロセスにこそいまや入るべきである。ホネット自身によってもいまだ進行中である「学以前のレベルにある審級」を軸とする運動研究，そして経験的研究の扉はいま開かれたばかりである。その扉の先には，ホネット理論の視座から見える新たな理論的視点と社会分析が広がっているはずである[8)]。

後注

1）早稲田大学アカデミックソリューション 社会連携企画部　教育研究コンサルティングチーム 所属

2）社会構想を含めた社会学の代表的な参考事例として西原（2010）を挙げておく。

3）ここで記載した「不正の経験」の言語は，Mißachtung である。Mißachtung とは，原義的には achtung がない状況を指す。ホネットも Mißachtungsformen という用語を用いて，Mißachtung の様々な状況を想定している。「不正の経験」とは，Mißachtung が当事者にとっての経験として位置づけられる場合を指す。本稿では，その他に，「尊重の欠如」，「存在の否認」という訳語が登場する。いずれも Mißachtung によって表現すべき事態を翻訳していると捉えておく。同用語については，いずれにしても，多様な事態を指すことを指摘しておきたい。当面は，以下に『承認をめぐる闘争』において示された表を参考に Mißachtung と多様な Mißachtung の事態を示しておくにとどめよう。

表　多様な Mißachtung の事態

承認の形式	愛	法	連帯
Mißachtung の事態	虐待，暴力的圧力	権利の剥奪，排除	尊厳の剥奪，卑しめ

なお，日暮（2008,2016）では，ホネットの最新の動向も含む検討がなされており，水上（2004）では，ホネット理論と社会運動との関連が先行的に示されている。また，ここでは示しきれないが，ホネット理論に関する日本での先行研究は多様な形でなされていることを付け加えておきたい。

後段で承認論の応用可能性として指摘する，自然との承認関係については，ホネット（2005=2011）で物象化理論と絡めて論じられている。

4）「社会的ダイナミクス」論文とは，「Mißachtung の社会的ダイナミクス」（Honneth 1994 → 2000=2005）の略称である。

5）同概念をホネット承認論の核とみなして議論を展開している論文として，赤石（2007），出口（2010）を挙げておく。なお，いずれも，拙稿（2004）への言及をしていただいている。

6）同項の記述については，拙稿・佐藤（2004）を参照している。

7）批判的共同分析という視点は，現代日本においては，市民参加型社会という名のもとに近年様々な形で，展開されているワークショップや類似の活動の理論的基盤となりうる可能性があると考えている。今後の展開可能性として，2 つの視点を提示しておきたい。1）理論的には，行為を超え出るような視点，本稿でいえば，社会構想や社会倫理のような視点をうまく取り入れることが必要であると考えている。そのような問題に取り組んでいる代表的な事例として，ジェシカ・ベンジャミン（1998=2018）や國分・熊谷（2020）を取り上げておく。ここでは，2 者関係に調停的な第三者の視点（ベンジャミン）や社会の成立における行為の範疇を超え出る視点（國分・熊谷）について検討がなされている。

2）実践的には，グループワークのような形で実践されていることの要点をどのようにフレームワークとして検討するかということにあると考えている。筆者はかつての勤務大学（静岡大学）において静大フューチャーセンターというワークショップ型の活動に参加している。同活動は，不定期に参加者と課題提案者を募り，3 時間程度ワークショップ形式で課題について議論を実施するも

のである。理念として，「多様性」，「対話」，「未来志向」を掲げている，なお，同活動への参加は現時点で半年ほどで，かつ 10 回程度の参加ではあるが，同活動における体験は，本稿が検討した，理論と実践との関係を検討する際にも大いに役に立った。地域の活動当事者の課題を当日の参加者 10 数名でブレインストーミングなどで検討する作業は，当事者と参加者との相互行為から成立している。同作業に一参加者として参加できた経験は，現場との対話という相互行為の様相と効果（当事者へのフィードバックや参加者の満足など）を体験するのに適していた。

8）筆者は，本稿の視点とは異なるが，拙稿（2014）にて，公共圏論とコミュニケーション論，および権力論の検討から導出された社会運動分析に関する仮説をもとに，環境 NGO 及びローカルな運動団体の動向についての経験的研究を実施している。なお，本稿が指摘するホネットを含むフランクフルト学派の経験的研究への志向については，濱西（2004）にて既に指摘されており，濱西（2016）では，本稿の指摘する，理論と運動研究との関係についてアラン・トゥレーヌの理論を参照に，より進んだ形で検討がなされている。また，別の文脈であるが，渡辺（2015）は，ゴフマンの理論研究を質的調査研究の観点から整理しており，理論と実証・実践との関連の検討に関して着目に値するものである。

文献

赤石憲昭 2007「ホネットの批判的社会理論の批判性―現代における労働と承認の問題圏」『情況』2007,11・12, pp.134-159.

Benjamin,J 1998 *Shadow of The Other Intersubjectivity and Gender in Psychoanalysis*, Routledge.（＝ 2018 北村婦美訳『他者の影－ジェンダーの戦争はなぜ終わらないか』みずず書房）

Crossley, N. 2002 *Making Sense of Social Movements*, Open University Press UK Limited.（＝ 2009 西原和久・郭基煥・阿部純一郎訳『社会運動とは何か―理論の源流から反グローバリズム運動まで』新泉社）

出口剛司 2010「アクセル・ホネットの承認論と批判理論の刷新―批判理論はネオリベラリズム的変革をどう批判するのか」『現代社会学理論研究』第 4 号, pp.16-28.

Habermas, J. 1981 *Theorie der kommunikativen Handelns, Bd1,2* Suhrkamp.（＝ 1985 河上倫逸・M・フーブリヒト・平井俊彦訳『コミュニケイション的行為の理論（上）』未来社, ＝ 1986 岩倉正博･藤澤賢一郎･徳永恂･平野嘉彦・山口節郎訳『コミュニケイション的行為の理論（中）』未来社, ＝ 1987 丸山高司･丸山徳次･厚東洋輔･森田数実・馬場孚瑳江・脇圭平訳『コミュニケイション的行為の理論（下）』未来社）

濱西栄司 2004「社会学的介入の理論と実践―アラン・トゥレーヌ，フランクフルト学派，ヴィンセンヌ学派」『現代社会理論研究』第 14 号, pp. 114-127. 2016『トゥレーヌ社会学と新しい社会運動理論』新泉社

日暮雅夫 2008『討議と承認の社会理論―ハーバーマスとホネット』勁草書房

2016「ホネット『自由の権利』における「社会的自由」の境位―歴史における社会闘争の意義」, 日暮雅夫・尾場瀬一郎・市井吉興編著『現代社会理論の変貌―せめぎ合う公共圏』ミネルヴァ書房, pp.15-38.

Hobson, B. 2003 *Recognition Struggles and Social Movements. Contested Identities, Agency and Power*, Cambridge University Press.

Honneth, A. 1980 Arbeit und instrumentals Handeln. Kategoriale Probleme einer kritischen Gesellschaftstheorie. in *Arbeit, Handlung und Nor mativitaet. Theorie des historischen Materialismus 2*, Hrsg. von Axel Honneth und Urs Jaeggi, Suhrkamp, pp.185-233.

―――, 1985a *Kritik der Macht, Reflexionsstufen einer Kritischen Gesellsc haftstheorie*, Suhrkamp.（＝ 1992 河上倫逸監訳『権力の批判』法政大学出版局）

―――, 1985b ＝ Habermas, J. 1985 *Die Neue Unuebersichtlichkeit*, Suhrkamp.（＝ 1995 河上倫逸監訳・上村隆広・城達也・吉田純訳『新たなる不透明性』, 松籟社）

―――, 1992 *Kampf um Anerkennung, Zur moralischen Grammatik sozial er Konflikte*, Suhrkamp（＝ 2003 山本啓・直井清隆訳『承認をめぐる闘争』法政大学出版局）

―――, 1994 → 2000 Die soziale Dynamik von Mißachtung. Zur Ortbestimmung einer kritischen Gesellschafttheorie, in 1994 Christoph Görz（Hg.）, *Gesellschaft im Übergang. Perspektiven kritischer Soziologie*, Darmstadt,（＝ 1999 藤野寛訳「軽んじ（られ）ることの社会的ダイナミズム」『フランクフルト学派の今を読む』所収 情況出版）→ 2000 *Das Andere der Gerechtigkeit, Aufsaetze zur praktischen Philosophie*, Suhrkamp.（＝ 2005 加藤泰史・日暮雅夫・池田成一・池田拡吉・神谷美砂子・庄司信・高畑祐人・竹内真澄・福山隆夫・舟場保之・水上英徳・宮本真也訳『正義の他者』法政大学出版局）

―――, 2002a Grounding recognition, Inquiry 45, Routledge, pp.499-520.

―――, 2002b ＝ Anders, P. & Rasmus, W. 2002 “An Interview with Axel Honneth: The Role of Sociology in the Theory of Recognition”, *European Journal of Social Theory*, 5（2）, pp.265-277.

―――, 2003 Die Pointe der Anerkennung. Eine Entgegnung auf die Entgegnung., in 2003 Fraser, N. & Honneth, A. *Umverteilung oder Anerkennung? Eine politisch-philosophische Kontroverse*, Suhrkamp, pp.271-305.

―――, 2005 *Verdinglichung, Eine anerkennungstheoretische Studie*, Suhrkamp.（＝ 2011 辰巳伸知・宮本真也訳『物象化―承認論からのアプローチ』法政大学出版局）

Honneth, A. & Joas, H. 1980 *Soziales Handeln und menschenliche Natur, Anthropologische Grundlagen*

der Sozialwissenschaften, Campus Verlag.
國分功一郎・熊谷晋一郎 2020『〈責任〉の生成』，新曜社
水上英徳 2004「再分配をめぐる闘争と承認をめぐる闘争—フレイザー / ホネット論争の問題提起（特集：社会理論と社会運動）『社会学研究』, 76, pp.29-54.
西原和久 2010『間主観性の社会学理論—国家を超える社会の可能性［1］』新泉社
荻野達史 2006「新たな社会問題群と社会運動—不登校，ひきこもり，ニートをめぐる民間活動」,『社会学評論』, 57（2）, pp311-329.
佐藤直樹 2004「ホネット『承認をめぐる闘争』における『批判』の論理構成—内世界的超越という視座から」『名古屋大学社会学論集』25, pp.45-67.
2014『NGO 運動における『正当化』の社会学的考察—アドボカシーを中心とする環境運動と公共圏』（博士論文）（武蔵大学機関リポジトリ所収）
成元哲 2004「なぜ人は社会運動に関わるのか—運動参加の承認論的展開」, 大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編『社会運動の社会学』有斐閣, pp.53-71.
渡辺克典 2015「ゴフマネスク・エスノグラフィー」, 中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン—やりとりの秩序の社会学』, pp.26-45.